

千葉県袖ヶ浦市

かさ 笠 がみ 上 A 遺 跡 (2)

－ 久保田地区急傾斜地崩落対策に伴う埋蔵文化財調査 －

2013

袖ヶ浦市教育委員会

序 文

袖ヶ浦市は、房総半島の東京湾側中央部に位置し、平野部の水田地帯を中心に、東部から南部にかけての丘陵地帯、北部の台地、海岸部の埋立地といった多くの表情を持つ所です。人びとの暮らしの営みも同様に、それぞれの地域で個性豊かな歴史を紡いできました。

今回、発掘調査をいたしました笠上A遺跡は、東京湾を一望できる台地の先端に位置し、現在では眼下に工場地帯が広がっています。かつては、漁労を生業とした人びとが、この地と海とを駆け巡っていたことでしょう。

往古、この地には、笠上の観音様と親しまれ、近隣より広く崇敬を集めた笠上寺が所在していました。行基の伝説に彩られた古刹は、残念ながら現在、いにしへの姿をとどめてはおりませんが、その信仰は、地域の方がたの心に今も深く息づいています。

このたび、急傾斜地崩落対策に伴う発掘調査により、古墳時代の竪穴住居を検出しました。住居からは多量の土玉が見つかり、漁労にかかわるもの、あるいは祭祀にかかわるものなどと推測できますが、いずれにしても当地の歴史を考える上で、重要なメッセージを示唆しているように感じられます。

本書を手にする市民の皆様が、これを契機に埋蔵文化財の保護・活用、その重要性について、理解と関心を深めていただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査の実施から発掘調査報告書の刊行にいたるまでご指導・ご協力いただきましたタレシ・ハリー様、千葉県教育委員会文化財課をはじめ、関係者の皆様に対して心から厚くお礼申し上げます。

平成25年2月

袖ヶ浦市教育委員会
教育長 川島 悟

例 言

1. 本書は急傾斜地崩落対策に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、袖ヶ浦市久保田字行基谷3382番に所在する笠上A遺跡（千葉県遺跡分布地図 No.1、調査コードはSG113）である。
3. 発掘調査は平成24年7月12日から同年7月24日まで行い、整理作業を平成24年8月1日から8月31日まで及び同年12月19日から平成25年1月11日まで袖ヶ浦市教育委員会が行った。
4. 発掘調査及び整理作業は、生涯学習課主査 桐村久美子が行った。
5. 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 25,000分の1地形図 「姉崎」
第2図 袖ヶ浦市発行 2,500分の1地形図 No.5・9
6. 今回の調査に伴う記録図書類や写真類及び出土遺物は、袖ヶ浦市教育委員会で保管している。
7. 挿図の縮尺は各図に明記し、方位は座標北とした。また標高値の単位はcmまでとした。

目 次

序文

例言

I 序章	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
3. 調査経過	1
4. 調査概要	1
5. 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
6. 調査及び整理作業の方法	2
II 笠上A遺跡の調査	4
1. 古墳時代	4
2. まとめ	5

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図
第2図 周辺地形図
第3図 SI001遺物出土状況図
第4図 SI001平面図
第5図 出土遺物実測図(1)
第6図 出土遺物実測図(2)

表 目 次

第1表 出土遺物観察表（土玉）

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景、SI001遺物出土状況、完掘
図版2 SI001出土遺物

I 序 章

1. 調査に至る経緯

平成24年6月1日付けで、タレシ・ハリーから袖ヶ浦市久保田字行基谷3382番における埋蔵文化財の所在についての問い合わせがあり、問い合わせ地は周知の遺跡である笠上A遺跡内にあたる旨を回答した。

その後、協議を行った結果、土木工事を伴う切土を実施することから、記録保存の措置を講ずるとの結論に達し、対象面積916㎡のうち33.5㎡の確認調査を実施し、平成24年7月4日付け袖教生第992号にて確認調査の結果を通知した。その結果を受けて54㎡の本調査を実施することとなった。

発掘調査及び整理事業は袖ヶ浦市教育委員会が行った。

2. 調査組織

袖ヶ浦市教育委員会

教育長 川島悟 教育部長 茂木好明 教育次長 篠原幸一（平成24年8月28日まで）
教育部参事兼生涯学習課長 井口崇 生涯学習課文化振興班 班長 西原崇浩
主査 桐村久美子（調査・整理担当者） 主任主事 田中大介 主事 前田雅之

3. 調査経過

平成24年6月25日から6月28日にかけて国庫補助金を受けて33.5㎡/916㎡を対象とした確認調査を実施した。その調査成果については、『平成24年度千葉県袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書』として平成25年3月に袖ヶ浦市教育委員会から刊行する予定である。

本調査は、確認調査を実施した範囲のうち堅穴住居が確認できた54㎡を対象として、平成24年7月12日から24日に実施した。

整理事業は平成24年8月1日から8月31日まで遺物実測・トレース等を行い、同年12月19日から平成25年1月11日まで遺物写真撮影・レイアウト作成・原稿執筆等を実施した。

4. 調査概要

今回の調査は、個人による急傾斜地崩落対策に伴う事業で、事業対象面積は9,545㎡である。

埋蔵文化財の所在についての問い合わせ後、調査範囲にあたる916㎡のうち33.5㎡を対象とした確認調査を実施し、1軒の堅穴住居を確認した。遺物は古墳時代土師器が出土した。

確認調査の結果を得て、確認調査で検出した堅穴住居の本調査を実施した。確認調査からの継続調査であるが、確認調査と区別するため、笠上A遺跡（2）と呼称した。

本調査の結果、確認調査で確認した堅穴住居1軒は、古墳時代後期に位置づけられることが明らかとなった。遺物は、古墳時代土師器、土玉等が出土した。

5. 遺跡の位置と周辺の遺跡

袖ヶ浦市域の北部を形成する袖ヶ浦台地は、養老川と小櫃川に挟まれて細長い地形を呈する。その北西部は台地の南東から東京湾へ向かって、笠上川、浜宿川、久保田川、蔵波川等の小河川が注ぎ、これらの河

川の作用によって台地が樹枝状に開析され複雑な地形となっている。河川の開析によって形成された舌状台地の上には数多くの遺跡が現存している。

笠上A遺跡は、笠上川によって形成された標高37mの台地上に所在し、眼下に東京湾が広がるというロケーションにある。当遺跡は、縄文時代・古墳時代の包蔵地として周知されてきた遺跡ではあるが、これまで発掘調査は行われていなかった。遺跡の立地する台地は、かつて笠上（瘡神）の観音と呼ばれ、疱瘡治癒に御利益があるとされた笠上寺（笠上観音堂）が所在した。観音堂の開山は行基の伝説に遡り、江戸時代には遠方から参詣者が集まったというが、観音堂は明治に入り別当寺である正福寺に合併され、現存しない。笠上寺跡採集とされる正嘉2年（1258）7月4日銘の武蔵型板碑が、拓本のみ現存する。

当地は望陀郡と海上郡との境にもあたり、海沿いに往来する際の陸路の要衝として、また海路においては遺跡の立地する台地が、海からの指標として機能していた可能性はある。また、遺跡内を赤道が通過しており、これを地域住民は「古道」と呼び親しんでいるが、現在は道として使用されていない。

笠上A遺跡から、笠上川をさかのぼった東岸に位置する上笠上谷遺跡は、旧石器時代の遺物集中地点6か所、環状ブロックなどを検出している。豆作台遺跡は、旧石器時代石器集中地点を19か所検出している。笠上A遺跡の南東に位置する笠上D遺跡でも、石刃が表採されており、旧石器時代の遺跡の存在が窺える。縄文時代は、豆作台遺跡で早期の竪穴住居、前期の竪穴住居、早期・前期の陥穴と早期の炉穴などを検出している。久保田川中流域の美生遺跡群でも陥穴と炉穴を検出している。

美生遺跡群は、弥生時代中期・後期の竪穴住居と方形周溝墓を検出しており、久保田川流域の中心的集落と位置付けられている。美生遺跡群は、古墳時代も継続して集落が営まれている。

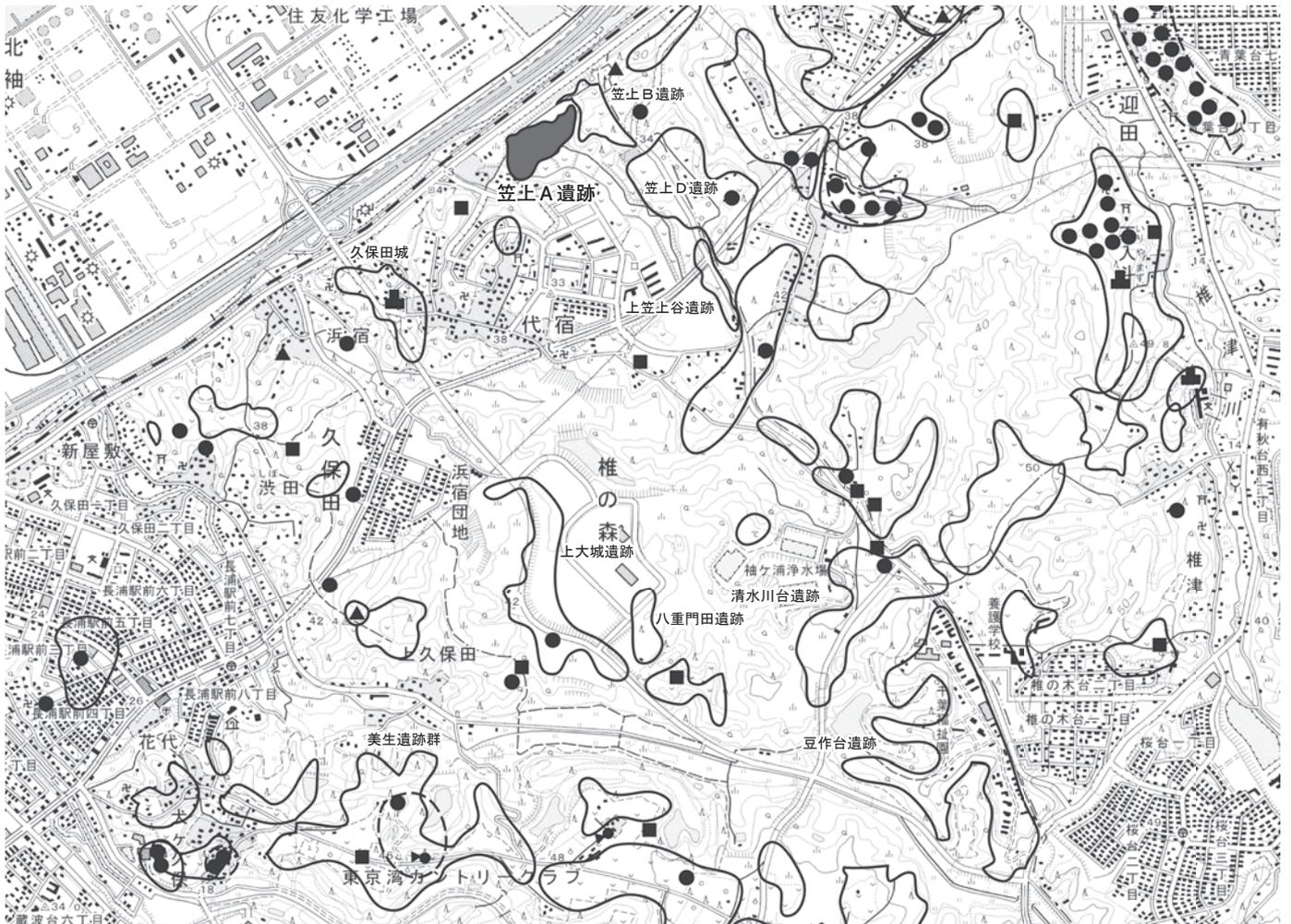
代宿川上流域の上大城遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居・方形周溝墓を検出したほか、奈良・平安時代においては竪穴住居・掘立柱建物・方形区画墓を検出したほか、瓦塔・浄瓶・香炉蓋・灯明皿といった仏教関連遺物が出土し、上大城遺跡に隣接する八重門田遺跡では、鉄滓・小鍛冶跡などの製鉄関係の遺構・遺物が見つかった。

6. 調査及び整理作業の方法

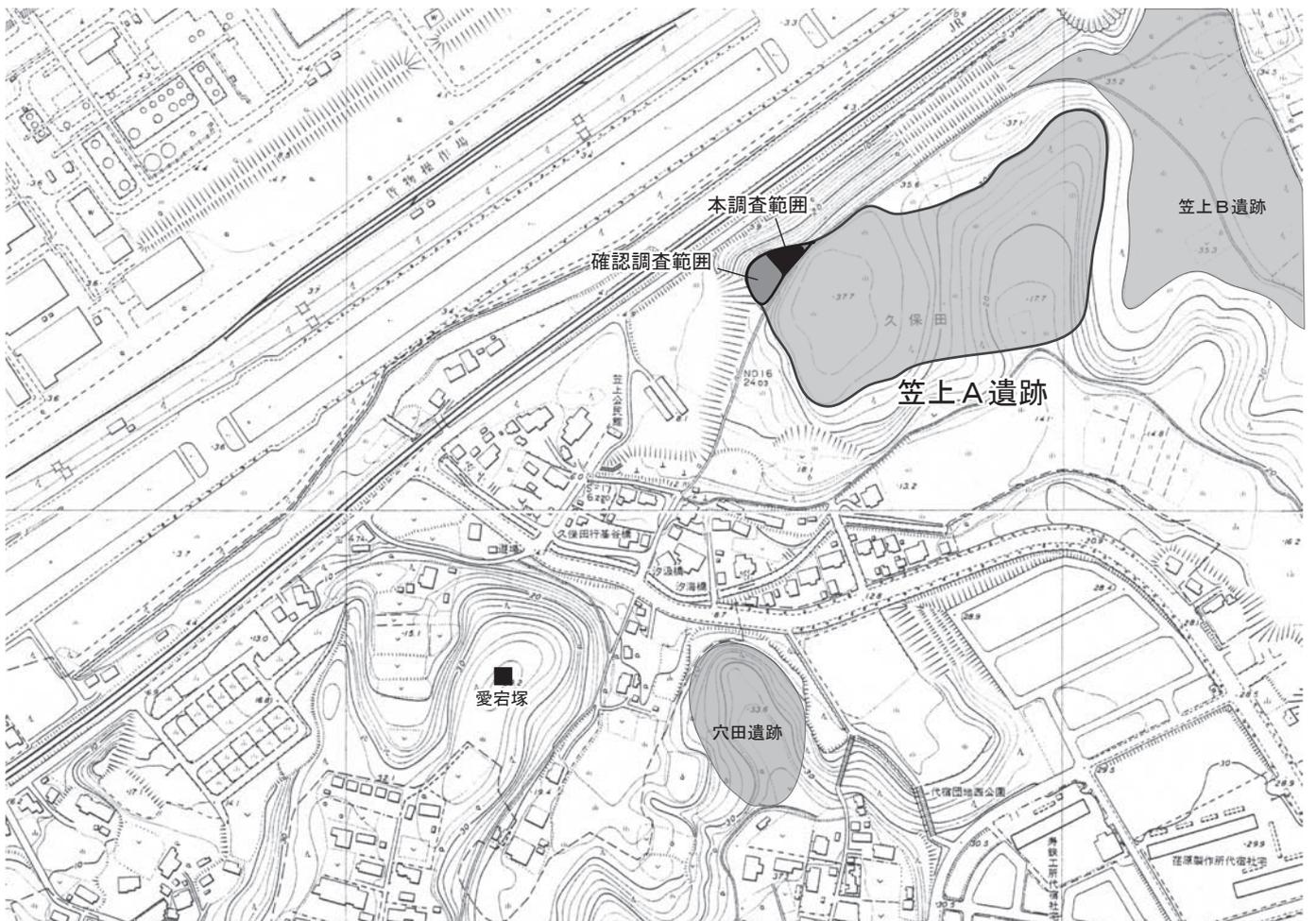
表土の除去はバックホウを用いた。調査にあたっては、確認調査時に設置した基準点測量による方眼杭を使用し、世界測地系に基づく座標北を基準として平面図等の測量を実施した。遺構の図面は20分の1縮尺を基本とし、平面図は平板測量で作成した。

遺構から出土した遺物のうち出土位置を記録したものについては、連続する4桁の数字を付して取り上げた。一括で取り上げた遺物については、算数字の通し番号を付し、一括取り上げの詳細内容を遺物台帳に記載した。遺構の名称は竪穴住居をSIとし、3桁の数字で遺構順序を表した（例 SI001）。なお、出土遺物には、遺跡コード-遺構名-遺物番号（一括取り上げの場合は通し番号）の注記を記した。（例 SG113-SI001-0001or1）

発掘調査の写真撮影は、中型カメラをメインカメラとし、フィルムは白黒6×7判を使用した。サブカメラとして35mm小型カメラを使用し、フィルムは白黒とカラーリバーサルを用いた。さらに補助的にデジタルカメラを使用した。報告書に掲載する遺物の撮影は、デジタルカメラを使用した。



第1図 周辺遺跡分布図(S=1/25,000)



第2図 周辺地形図(S=1/2,500)

Ⅱ 笠上A遺跡の調査

1. 古墳時代

SI001(第1・2図) 古墳時代後期

規模 主軸4.47m・副軸4.30m・北東壁高0.40m・南西壁高0.15m。

構造 平面形態は方形で、カマドを有する。主軸方位 N-44° -W。

柱穴4本(P1~P4)、梯子穴1箇所(P5)を検出。P2以外からは柱の抜き取りあるいは造り替えがされた様子が見える。柱穴は、いずれも床面から50cmほどの深さになる。梯子穴の下部の土層は硬くしまっていた。

貼床は部分的に硬化が見られるが、全体にさほど硬くない。貼床は、黄褐色土を充填しているが、部分的に暗褐色土を使用している。カマド下およびカマドの両脇は、暗褐色土の充填が見られた。掘方を見ると、北西壁から約60cm、北東壁から20~30cm、南東壁から10~30cm、南西壁から約30cmのところを一回り小さく1段下がっている。当初、こちらの大きさを築造したものを途中で拡張した可能性もある。

貯蔵穴(P6)は床面から80cmの深さになる。貯蔵穴の上部で高坏の脚部(12)、床面から40cm程度の深さで高坏の坏部(11)を検出した。カマドは、北西壁中央に白色粘土で袖を構築し、煙道は壁の外へそのまま伸ばした形跡がある。あまり強い燃焼部分は残っていなかった。カマド内と西側に遺物が集中していた。

出土遺物(第3・4図、表1) 主にカマドの西側を中心に、土玉が計38点出土した。他の遺物はすべて土師器と支脚等土製品で、全体で甕片2,104.8g、坏片25.53g、甑片1,156.73g、鉢片317.81g、高坏片1,128.28g、土製品は880.99g出土した。

1・2・3は甑である。1は、カマド西側の土玉集中箇所から出土、口径26.9cm、底径9.0cm、上部と下部は接合する箇所がないが、復元すると高さは60cm程度になる。40%程度の遺存。外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデを施す。色調は黄褐色で、胎土に白色粒・褐色粒・雲母を含む。2は、カマドの東側から出土、口径31.0cm、底径7.3cm、上部と下部は接合する箇所がないが、復元すると高さは30cm程度になる。接合できた破片は少ないが全体で40%程度の遺存。色調は橙色で、胎土に白色粒・赤色粒・雲母・砂粒を含む。3は鉢型の甑で、カマド内から5の甕と重なった状態で出土した。口径24.2cm、残存高5.9cm、底部を欠き20%の遺存で、色調は赤褐色、胎土に白色粒・赤色粒を含む。

4は、壺で住居の西側遺物集中箇所付近からの出土。底径5.9cm、残存高3.5cm。底部のみで、全体の10%程度の遺存。外面は横方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ。色調はにぶい赤褐色で、外面には赤彩が施される。胎土に白色粒・雲母・砂粒を含む。5は、甕でカマド内から3の甑と重なった状態で出土した。口径17.9cm、残存高14.3cm、底部を欠き、全体の30%程度の遺存。外面は縦方向のヘラケズリで、工具の跡が刷毛目状に残る。色調は赤褐色で、胎土に白色粒・雲母を含む。6は甕で、住居の西側、カマドの手前あたりからの出土。口径16.6cm、残存高12.9cm。口縁から体部上位の一部が残っているのみで、全体の10%程度の遺存。色調は橙色で、胎土に白色粒・褐色粒・雲母・砂粒を含む。

7~12、15は高坏、13は鉢、14は坏である。7はカマド東側からの出土で、口径13.0cm、残存高5.1cmで、脚部を欠き、坏部のみ30%の遺存。内面・外面とも横方向のヘラナデ。色調はにぶい黄橙色で、白色粒・褐色粒・雲母を含む。8は住居南東側からの出土で、底径9.0cm、残存高9.5cm。口縁を欠くが、全体の70%の遺存。内面・外面ともヘラケズリ。色調はにぶい黄橙色で、胎土に褐色粒・雲母を含む。9は住居西側の遺物集

中箇所からの出土で、脚部を欠くが、坏部は100%の遺存。口径13.9cm、残存高5.5cm。外面は縦方向のヘラナデの後、横方向にヘラナデ、内面は横方向のヘラナデで、内外面とも赤彩を施す。色調は橙色で、胎土に橙色粒・白色粒・雲母を含む。10はカマド東側からの出土で、坏部を欠き脚部のみの70%の遺存。残存高は4.5cm、残存底径9.2cm。外面は横方向のヘラナデで、内外面とも赤彩を施す。11は、貯蔵穴内からの出土で、住居の床面から40cm程の位置から出土。脚部を欠くが坏部は100%の遺存。内外面とも横方向のヘラナデ、内外面とも赤彩を施す。内面は焼けて荒れている。色調は赤褐色で、胎土に白色粒・雲母を含む。12は貯蔵穴上部から出土。坏部を欠き、脚部のみの90%の遺存。底径9.8cm、残存高4.5cm。外面は縦方向のヘラケズリ。内外面とも赤彩を施す。色調は明赤褐色、胎土に白色粒・赤色粒・雲母を含む。13は住居南東側からの出土で、口縁を一部欠くがほぼ完形。口径12.7cm、器高7.5cm。外面は横方向のヘラナデで、内外面とも赤彩を施す。色調は橙色で、胎土に白色粒・赤色粒・褐色粒・雲母を含む。14・15はともに確認調査時の出土遺物である。14は2トレンチなので、住居南側からの出土。口径10.2cm、残存高は3.4cm。10%程度の遺存で、内外面とも赤彩が施される。色調は赤褐色、胎土に赤色粒・橙色粒を含む。15は1トレンチなので、カマドのある住居北側からの出土。坏部を欠き、脚部の70%程度の遺存。残存高は4.9cm。外面および内面の最下部に赤彩が施され、色調は明赤褐色、胎土に白色粒・褐色粒・雲母を含む。

16～52は、土玉であり、そのほとんどがカマド西側の集中地点から固まるようにして見つまっている。調査当初は丸型の土錘として考え、漁網についた状態で埋没したとの見解だったが、赤彩の痕跡があるものが含まれていたため、漁具としての土錘であったとは断定ができない。土玉は、概ね最大長・最大幅とも3cm前後で、表面はヘラでの調整の痕跡をよく残している。土玉は、第3図から第4図に図示した以外に、40%程度の遺存で、表面の剥落が著しいものが1点あった。

遺物は、土師器高坏の特徴から、6世紀前葉と思われる。

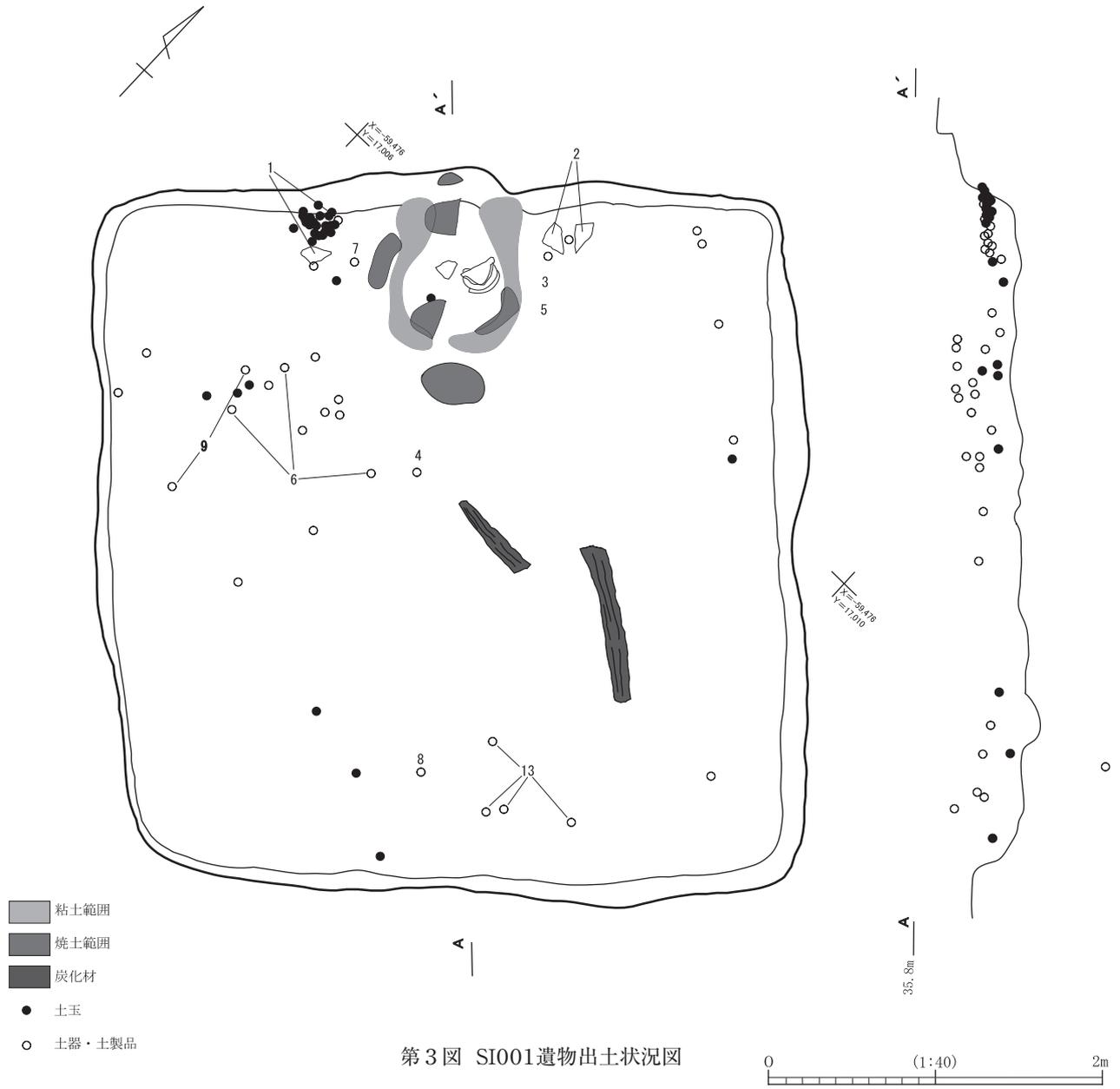
2. まとめ

今回の調査は、海に面した台地の最縁辺、遺跡範囲の北西端でもあったが、古墳時代後期の竪穴住居を1軒検出した。今回の調査範囲よりも南東に広がる台地上には、同時期だけでなく、さまざまな時代の集落が展開している可能性が濃厚にある。海を見下ろす断崖の上で暮らした人は、どのような人物だったのか。

当地に笠上寺があった頃、寺の境内には灯台があったという。笠上寺は、瘡神(かさがみ)つまり疱瘡除けおよび治癒の神として信仰を集めたという話であるが、この地が境内地として選ばれたのには、以前からの聖地としての素地があったからと考えられる。この地が古来より、漁師や航海する人にとって重要なヤマアテの山であったなら、自然と人びとの崇拜の対象となっていたであろう。寺の開山以前から、灯台やそれを管理する人がいたとしても不思議ではない。

今回の調査で検出した1軒の竪穴住居だけでは、すべてを語ることは難しいが、多量の土玉が土錘であれば、ここが漁労に携わった人の住居であると仮定できるし、土玉が漁に使われたものではなく何か祭祀的な目的を持ったものだとしたら、笠上寺へとつながる当地の聖地としての系譜をたどる上でさらに興味深い。

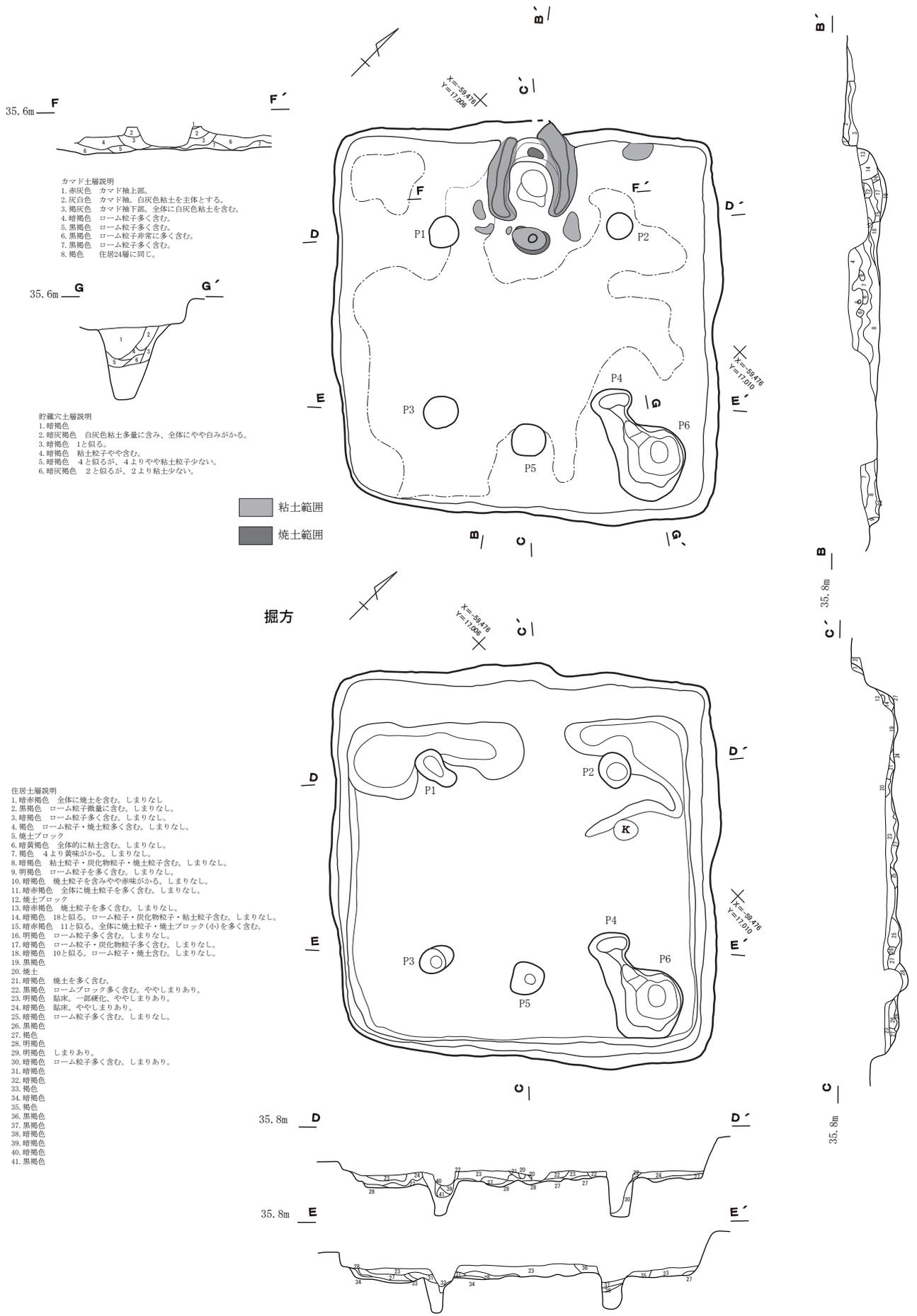
今後の調査により、笠上寺開山以前の当地の歴史が解明されていくことに期待したい。



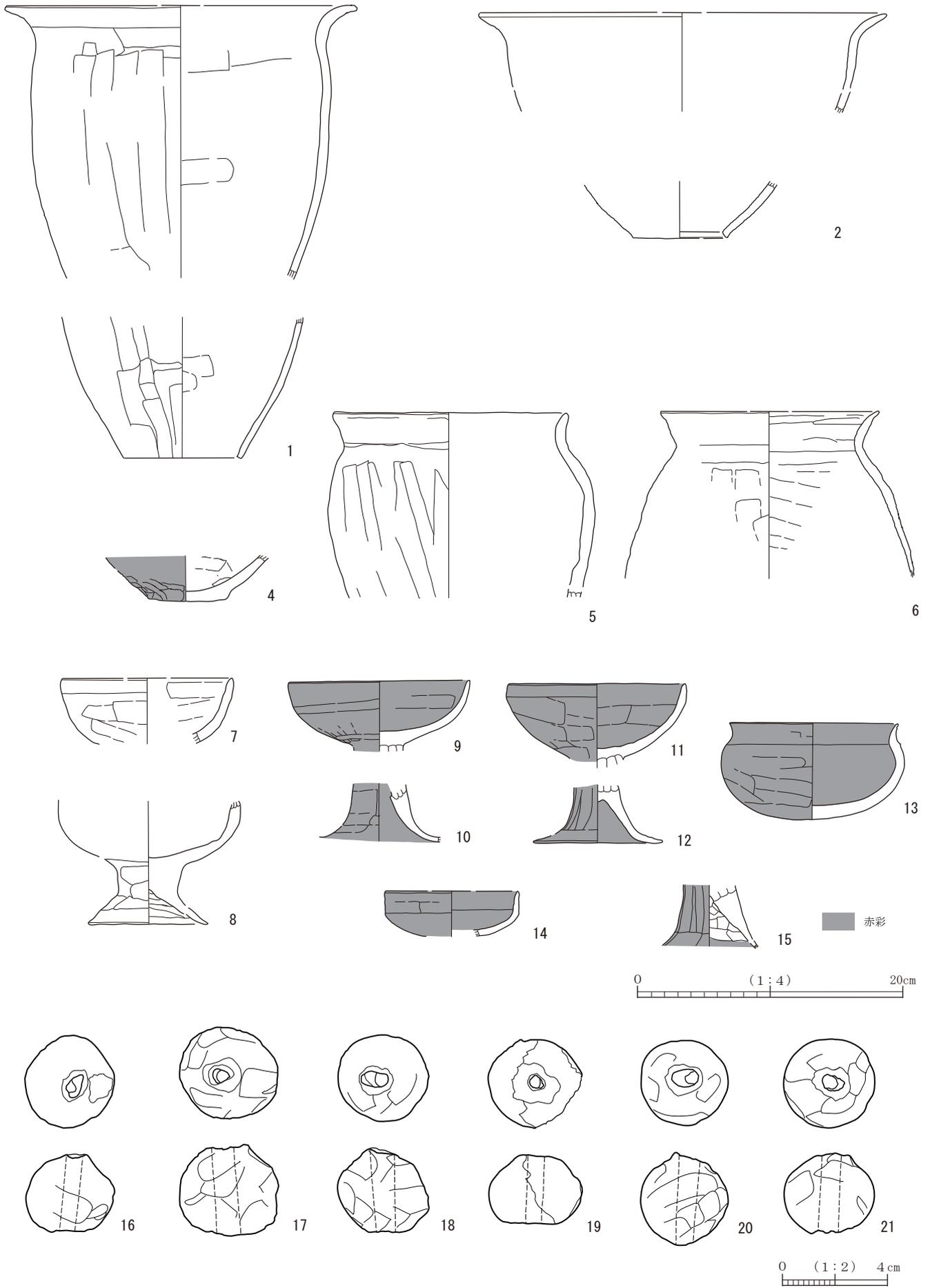
図版番号	遺存度	最大長(mm)	最大幅(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	赤彩	出土位置
第5図16	ほぼ完形	35.33	34.21	5.60	11.74	にぶい橙色		南
第5図17	完形	35.121	37.45	7.90	41.16	にぶい橙色		北
第5図18	完形	33.10	34.82	8.90	31.65	にぶい黄橙色		西側遺物集中箇所
第5図19	ほぼ完形	34.08	36.00	5.90	28.02	にぶい赤褐色		カマド西側
第5図20	完形	33.15	33.40	7.30	32.37	橙色	○	カマド西側
第5図21	完形	34.05	34.18	7.20	32.47	橙色	○	カマド西側
第6図22	完形	33.00	34.52	8.80	31.28	にぶい橙色	△	カマド西側
第6図23	完形	32.90	33.92	8.70	27.06	にぶい橙色		カマド西側
第6図24	ほぼ完形	32.30	33.65	6.95	27.75	にぶい橙色		カマド西側
第6図25	完形	32.10	32.60	7.00	31.15	橙色	○	カマド西側
第6図26	完形	29.89	32.72	6.30	27.20	橙色	○	カマド西側
第6図27	完形	35.80	32.35	6.20	32.14	橙色	○	カマド西側
第6図28	ほぼ完形	32.00	33.10	6.00	27.54	にぶい赤褐色		カマド西側
第6図29	完形	31.85	32.20	5.75	28.43	にぶい橙色	○	カマド西側
第6図30	完形	33.50	34.45	7.10	30.84	橙色	○	カマド西側
第6図31	完形	31.60	34.70	8.40	30.37	橙色	○	カマド西側
第6図32	90%	31.52	32.00	7.60	29.96	にぶい赤褐色		カマド西側
第6図33	ほぼ完形	32.20	34.75	6.52	32.00	橙色	△	カマド西側
第6図34	完形	32.20	34.68	7.00	28.96	にぶい赤褐色		カマド西側
第6図35	完形	34.74	33.90	7.50	30.78	にぶい赤褐色		カマド西側
第6図36	完形	31.60	33.20	6.52	29.28	にぶい赤褐色	○	カマド西側
第6図37	完形	31.28	35.10	6.00	33.36	にぶい橙色		カマド西側
第6図38	完形	33.25	33.30	7.60	30.08	橙色		カマド西側
第6図39	完形	32.58	33.65	5.90	31.83	にぶい褐色		カマド西側
第6図40	完形	32.50	33.55	8.90	30.58	橙色	◎	カマド西側
第6図41	完形	32.45	33.35	8.20	31.80	橙色	◎	カマド西側
第6図42	完形	32.60	33.50	8.10	30.94	にぶい橙色	△	カマド西側
第6図43	完形	31.80	32.30	9.68	30.00	橙色	◎	西側遺物集中箇所
第6図44	完形	32.00	33.50	6.90	29.84	にぶい赤褐色	△	西側遺物集中箇所
第6図45	完形	34.90	32.60	8.00	36.55	橙色	△	カマド内
第6図46	完形	31.15	32.70	10.10	31.48	にぶい橙色	△	西
第6図47	完形	32.00	32.30	6.70	26.83	橙色	○	北
第6図48	完形	33.50	34.70	7.40	33.54	にぶい褐色		南
第6図49	50%	34.75	29.20	5.70	17.33	にぶい褐色		カマド西側
第6図50	50%	33.12	25.50	(6.00)	22.59	橙色		カマド西側
第6図51	40%	36.5	20.2		11.93	にぶい赤褐色		西側遺物集中箇所
第6図52	40%	30.9	17.9		11.74	にぶい橙色	△	南

赤彩
 △赤彩痕跡の可能性がある
 ○赤彩の痕跡が残る
 ◎明瞭に赤彩の痕跡が残る赤彩

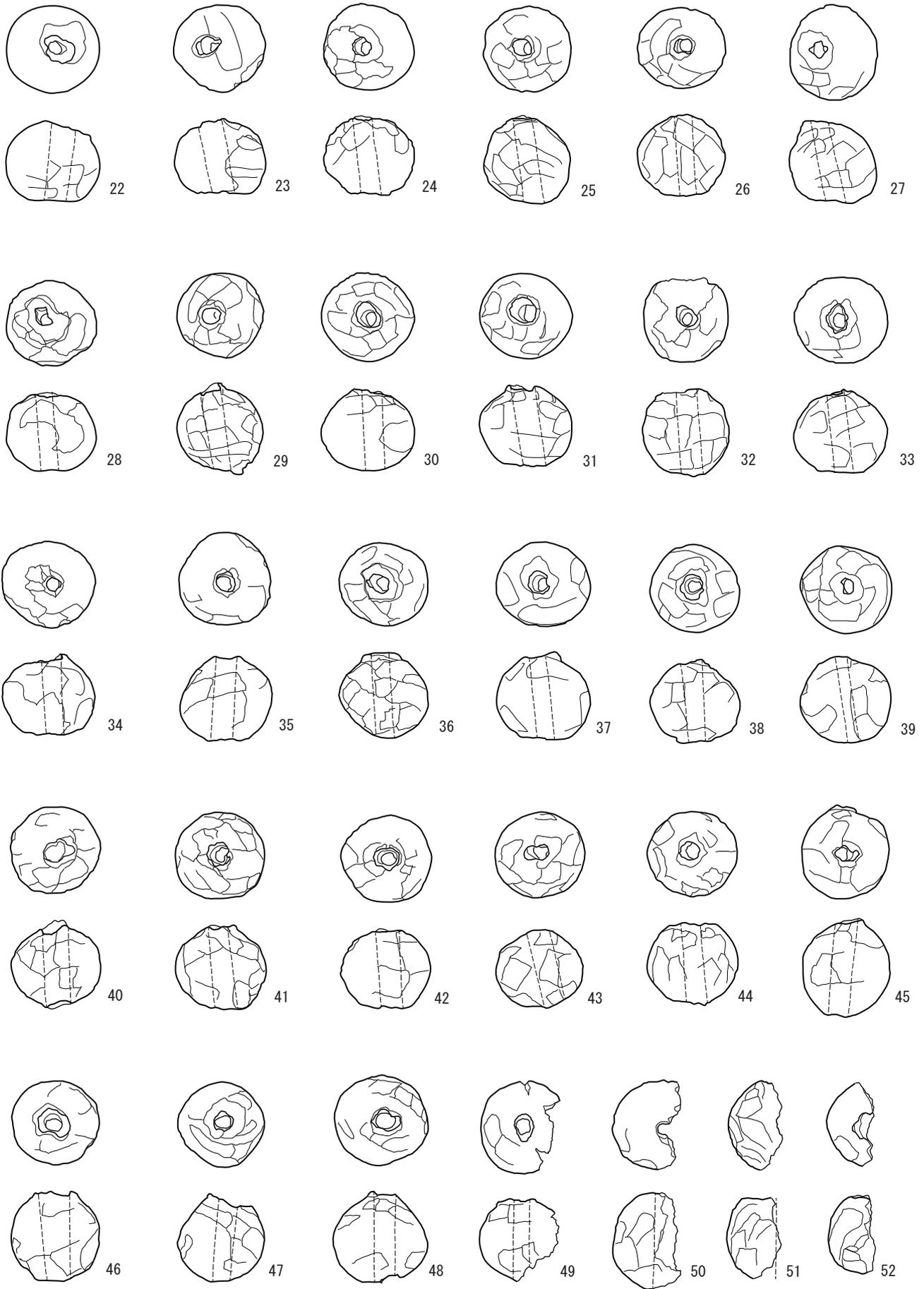
第1表 出土遺物観察表(土玉)



第4図 SI001平面図



第5図 SI001出土遺物実測図(1)



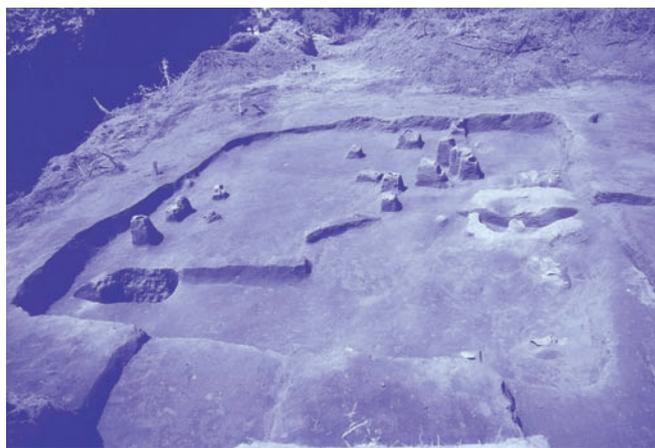
第6图 SI001出土遺物実測図(2)

0 (1:2) 4cm

写真図版



1. 遺跡遠景



2. SI001 遺物出土状況 北東→



3. カマド遺物出土状況 南東→



4. 土玉出土状況 南東→



5. 貯蔵穴遺物出土状況 南西→



6. カマド完掘 南東→



7. SI001 完掘 北東→



8. SI001 掘方 北東→

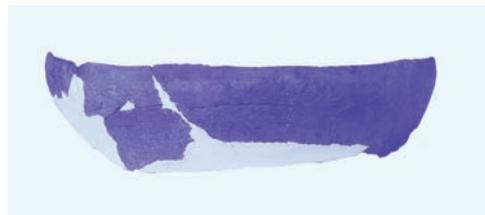
图版2



1



5



3



8



9



11



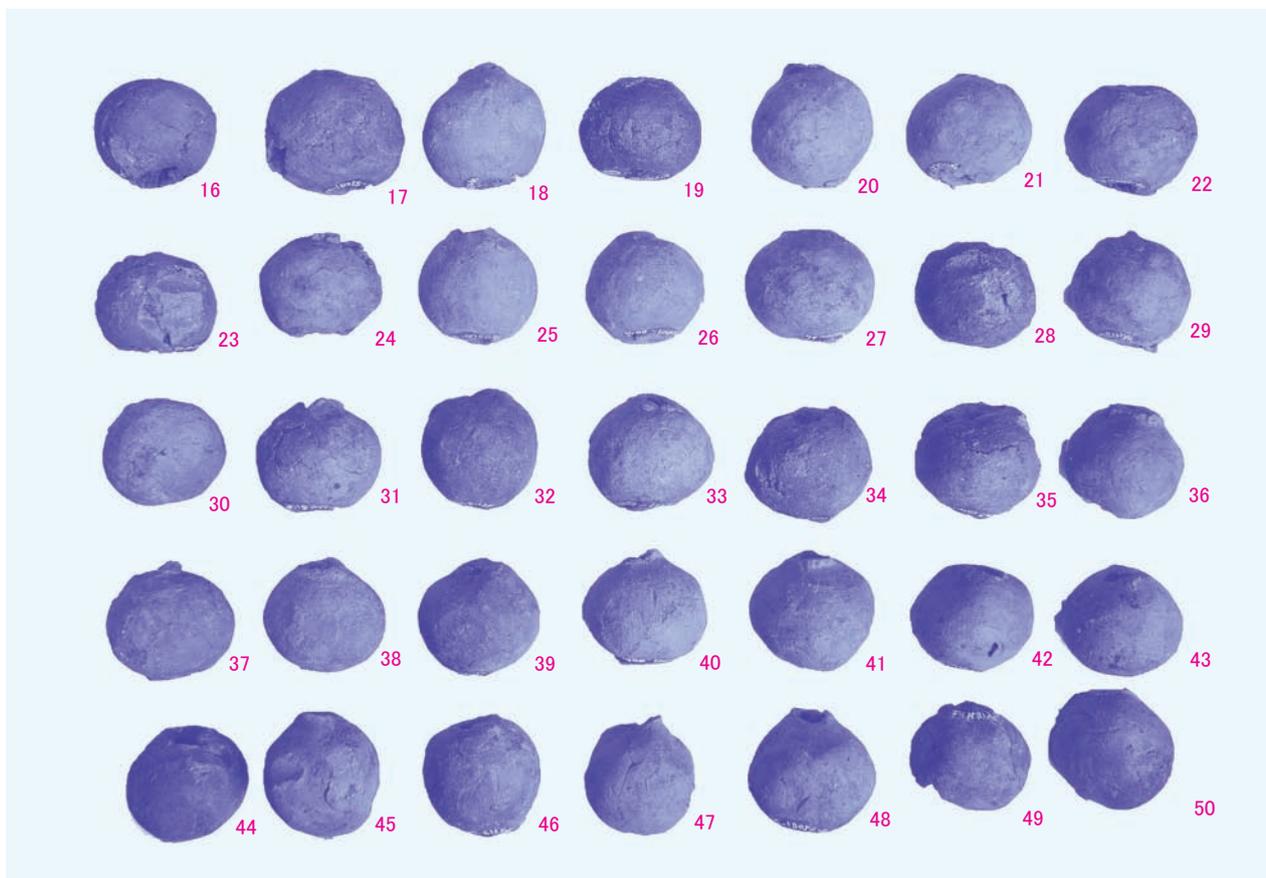
13



10



12



SI001 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ちばけんそでがうらし かさがみえーいせき							
書名	千葉県袖ヶ浦市 笠上A遺跡(2)							
副書名								
シリーズ名	袖ヶ浦市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第18集							
編著者	桐村久美子							
編集機関	袖ヶ浦市教育委員会							
所在地	千葉県袖ヶ浦市坂戸市場1番地1							
発行機関	袖ヶ浦市教育委員会							
所在地	千葉県袖ヶ浦市坂戸市場1番地1							
発行年月日	西暦2013年(平成25年)2月28日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号 コード	北緯 (tokyo97)	東経 (tokyo97)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
かさがみ いせき 笠上A遺跡	ちばけん そでがうらし くぼた あざ 千葉県 袖ヶ浦市 久保田 字 ぎょうきやっ 行基谷3382番	12229	SG113	35 ° 27' 49"	140 ° 01' 14"	20120712 20120724	54 ㎡	急傾斜地 崩落対策 工事
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
笠上A遺跡	包蔵地	古墳時代後期	竪穴住居	土師器 土玉	今回、笠上A遺跡で初めての発掘調査を実施して古墳時代後期の竪穴住居を検出した。			
要約	遺跡範囲北西端での調査であったが、古墳時代後期の竪穴住居を1軒検出し、住居から土師器・土玉が出土した。							

平成25年2月20日 印刷
平成25年2月28日 発行

袖ヶ浦市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集

千葉県袖ヶ浦市 笠上A遺跡(2)

-久保田地区急傾斜地崩落対策に伴う埋蔵文化財調査報告書-

発行 袖ヶ浦市教育委員会
千葉県袖ヶ浦市坂戸市場1番地1
印刷 大和美術印刷株式会社
千葉県木更津市中央1-1-6